

常盤寄席で落語を披露する林家染太さん—大阪市北区天満で



「常盤寄席」100回超え

夕日が傾き、辺りが暗くなりかけるころ、大阪中心部のビル街から太鼓や三味線の音色が漏れてくる。大阪・天満のビルの5階で、月に1回、落語が聞ける「常盤寄席」。2005年から毎月欠かさず、開催は100回を超えた。

松山市出身の林家さんには中学生のときに初めて落語を見て感銘を受けた。大阪の大学を卒業後に弟子入りし、偶然知り合った同郷の先輩が、芸を磨く場として常盤寄席を提供してくれた。

「今日のお客さんは良い反応だったね」。6月下旬、約1時間半の公演を終えて、落語家の林家染太さん(38)は満足そうな表情を浮かべ、額の汗をぬぐった。30人ほど入る小さな部屋は中高年だけでなく、親子連れもいてほげ満席。うどんを題材に話す林家さんが、ずずーと種やつゆをすする音を大きく響かせる。観客は声を出して笑った。

林家染太さん「臨場感ある一期一会」

このお客さん、結構シビアなんですよ。」
人気が低迷していた上方落語は、06年9月、大阪天満宮の近くに「天満天神繁昌亭」ができて再び盛り上がりを見せている。林家さんも今は繁昌亭での公演がメイン。それに比べ、常盤寄席は客も少なくもつからない。でも、今後大切にしたい。今度という。

6月の公演では、普段は袖から聞こえる三味線や太鼓を、客の前で演奏して見せた。「この音は彼を表現しています」「聞き手が出てくるときはこんな感じですよ」。小さな寄席だからこそできる演出に観客は身を乗り出して手をたたいた。

「狭いけど臨場感が楽しい。やっぱり寄席はこうじゃないと」。終了後、興奮しながら帰って行く客を見届け、林家さんはほじみじみと言った。「同じ話でもうまくいくこともあれば、だめなときもある。一期一会だと思えるのが、寄席の良いところなんです」。

奇席 落語を中心とした大衆演芸を客に見せるための興行場。一年中高語を楽しむ寄席を定席といひ、東京の鈴本演芸場(上野)や末広亭(新宿)がある。大阪の寄席は戦後、経営難からすべて閉鎖されたが、2006年9月、個人や企業の寄付金により、約10年ぶりに定席の天満天神繁昌亭が設立された。